鼻濁音の喪失過程について
ー朝鮮時代の日本語学習書を中心にー

趙　　堈　　熙

1、はじめに

朝鮮時代の司訳院[1]の倭学訳官採用試験の日本語学習書は、『世宗実録』『経国大典』によると、伊路波など14種類を課したとされているが[2]、両国語の変化により十七世紀に全廃され、『捷解新語』(1676、以下原刊本)のような新しい教科書が編纂された。その約一世紀後、改修版『改修捷解新語』(1748、以下改修本)が、また、その改修板を改修した『重刊改修捷解新語』(1781、以下重刊本)が作られている。

これらの日本語学習書のひらがな字体は濁音表記を持たないが、その音節に付けられているハングル音注は、

なかもとり申へく候(戻り)　mon-to-ri　〈改下10ウ〉

なかもとりふね(戻り)　mo-nto·ri　〈改一11〉

なかもとりふね(戻り)　mo-to·ri　〈改四10ウ〉

のように濁音節の前に鼻音表記を加えて表記しているものと平音k・t・p・zのみで表記しているものとが見られる。

本稿では、これらの濁音に付けられている音注表記について分析し、三種の表記の背景について明らかにした上で、鼻音的要素の喪失過程を考察するのを目的とする。なお、資料に現れる日本語は具体的に何処の言語を表しているかについては別に機会を期し、ここでは資料に現れる現象のみにとどまりたい。

2、濁音節の音注表記

濁音に表記されている音注表記は、改修されることにより内部的には変化があるが、その表記方法は、森田(1957)が指摘したとおりである[3]。第一方法、第二方法、第三方法は森田(1957)に従う。

日本語のハングル音注として最も古い『伊路波』(1492)に見られる濁音表記は、セズ sy ∂ n-zu、程 hon·co、ハバ ham-pa、メデ my ∂ n-dy ∂など、何れも第一方法が表記されて

いる。『伊路波』より早い『老松堂日本行録』(4)『海東諸国記』(5)に見られる日本の地名のなかに濁音を表していると確認された39例（擬音の次の濁音2例を除く）全てが濁音前の音節に第一方法のような鼻音韻尾を持っている漢字が表記されている。

・尼神都麻里（海） ni-sin-to-ma-ri 〈西泊〉

即ち、濁音節前に「司」siではなく、「神」sinのnで終わる語で表記している。

ところが、『捷解新語』には今まで見られなかった第二方法であるŋkなどのような表記と第三方法である平音表記のkなどのような表記が現れる。この表記を第一方法の～ŋ-kと同じ音声表記として見るべきであろうか。安田(1960)は「あかがね」における両表記法を考え同値と見ているが(6)、「いかが」を'i-ka-ŋka 〈重六15〉のような韓国語にないŋk表記と'i-kaŋ-ka 〈原六11ウ〉のような韓国語の表記によく使われる～ŋ-k表記とを同じように発音したとは考えがたいし、また、改修される度にこの第二方法の濁音に占める比率が高くなることは、鼻濁音を表しているとは考えがたい。

音注方法を考察して見た結果、第一方法・第二方法・第三方法は次のように各々異なる機能を持っていることが分かった。

①～ŋ-kのような第一方法は「ひンがん」（彼岸）のように鼻音的要素、おそらく鼻音的入り渡り音が濁音に前接して存在することを表した音注である。

②kのような第三方法は、清音・濁音ともに表せることができる韓国語の平音表記で表記し、それを読んでも日本語の濁音に相応しい所を表記した音注である。

③ŋkのような第二方法は、平音表記が韓国語の干渉で清音になる恐れがあるところは、それを避ける目的で鼻音ŋなどを前接して表記した音注である。

即ち、濁音の音注表記は、鼻音性は第一方法で、濁音は第三方法で、濁音の平音表記が清音になる恐れがあるところは第二方法で記したのである。この基準に準じて分析を行う。なお、分析してみた結果、重刊本はガ、ギ、グ、ゲの音節において、人為的とも云える音注の特徴が見られる(7)。

分析に当たっては次のような点を念頭に入れる。

（1）撥音の次の濁音は音注表記上鼻音が入っているかどうか区別が付かないので資料として扱わない。

いんで（打消） 'in-ty ∂ i 〈原二9〉

いでいり（出入） 'in-ty ∂ i-'i-ri 〈原四1ウ〉

（2）頭部と内部との区別は会話文を検討して決める。従って例のように単語としては頭部であっても会話文で内部の環境の場合は内部として扱う。

がってん御ざるまいか 〈原五26〉 →切れ目の頭部

御がってんに存じられて〈原四４ウ〉→切れ目の内部

まづ今日は祝うての　儀ぢゃほどに　〈原六４ウ〉　→切れ目の頭部

いそぎたいものぢゃが　いかがござる儀〈原六11ウ〉　→切れ目の内部

なお、以下での頭部と内部は会話文における切れ目を基準としたものである。

１）ガ行音表記

ガ行音の表記としては、～ｎ-k、ｎ k、kの三様が見られる。頭部におけるガ行音の音注の分布は表１）の通りである。

表１　頭部ガ行音の音注表記

	原刊本		改修本		重刊本	
	ｎ k	k	ｎ k	k	ｎ k	k
ガ	0	6	0	5	0	2
ギ	0	9	0	15	16	1
グ	0	2	0	2	0	2
ゲ	0	19	0	11	0	7
ゴ	447	5	568	14	465	15

ガは「がら、がる、が（助詞）、がく」などが見られるが、「がく、がってん、がまし、がんちょう」の頭部の環境である６例は全てｋで表記されている。改修本、重刊本も同じ傾向である。

ギは「ぎんみ（吟味）」１例と「ぎ（儀）」21例など22例が見られる。このうち、ぎんみ（吟味）１例はkiで表記されているが、ぎ（儀）は８例がkiで、13例がｎ-kiで表記され、混用を見せている。ギがｎ-kiで表記されているのは下記のように実際会話文では切れ目の内部の環境にあるものである（させるぎ　御ざらんところに〈原六５ウ〉）。反面ｋで表記されているのは、会話文の切れ目の頭部の環境にあるものである（まづこんどわいわうての　ぎぢゃほどに〈原六４ウ〉）。

〈原六５ウ〉の「させる儀」のように「ぎ」が前の音節と続けて読まれる所はｎ-kiで表記されているし、〈原六４ウ〉の「祝うての　儀ぢゃほどに」のように「ぎ」の前で切られて、実際の会話文で頭部の環境になる所はkiで表記されている。従って、頭部の「ぎ」はすべてkiで表記されていることになる。改修本でも「ぎ」が30例見られるが、その中にｎ-kiで表記されている15例は内部の環境として見るべき所である。改修本で新たに見られる「ぎ」９例も同じ傾向である。即ち、同一語でも会話文上、頭部では鼻音的要素がなくなったので表していないが、内部の環境では鼻音的要素が入っていたので表しているのである。

グは「ぐんくわん」kun-koan〈原－22〉など２例、ゲは「げく」kyｅi-ku〈原二２ウ〉など19例が見られるが全て平音のｋで表記されている。改修本、重刊本も同じである。

ゴは「ごきない」（五畿内）〈原九21ウ〉など５例は平音のｋで表記されているが、「ごうた」（御歌）のようにｎkoで表記されているほとんどは「御」の音注である（421例）。「御」の音注の中に例外を見せているのは見られない。「五」が頭部に現れるのは15例で、その中

表2）内部ガ行の音注分布

	原刊本			改修本			重刊本		
	ŋ-k	ŋ k	k	ŋ-k	ŋ k	k	ŋ-k	ŋ k	k
ガ	318	0	7	299	0	16	116	90	8
ギ	112	0	0	70	0	2	16	38	1
グ	93	0	6	69	0	14	6	59	11
ゲ	43	0	1	57	0	6	11	28	1
ゴ	74	11	2	67	0	21	89	0	2

に12例がŋ koで表記されている。なお、「ごとく」のような用例もかなり見られるが、

御いのごとくŋ ko-'i-no ŋ-ko-to-ku 〈原三5〉

のように内部の環境としてみるべきである。これらは内部のところで扱う。

内部のガ行はŋ-k、ŋ k、kの三様の音注で表記されている。その分布は表2）の通りである。ガは原刊本、改修本ともにほとんどŋ-kで表記されている。

あかがね 'a-ka ŋ-ka-ny ∂ 〈原三28ウ〉

かみがた ka-mi ŋ-ka-ta 〈改三17ウ〉

改修本から重刊本へは～ŋ-kiの表記も116例見られるが、改修本でŋ-kの音注表記がŋ kに改修されている（90例）。グ、ゲ、ゴも同じ傾向である。

いかが 'i-ka ŋ-ka 〈改六2〉　　いかが 'i-ka-ŋ ka 〈重六2〉

kで表記されている例が原刊本で7例見られるが、韓国語の平音の場合、有声音と有声音との間では有声音になる。従って、下記の例のような「ながら」のkaは［ga］になるのでkaの音注を用いても日本語の「が」の音に相応しいのである。にもかかわらず、鼻音ŋを挿入したのは鼻音的要素を表していることであり、kのみで表記しているのは、濁音に鼻音的要素がなくなったことを表していることを意味する。従って、次の「ながら」の内、鼻音表記が書かれているものは［na ŋ gara］のように鼻濁音として発音した所であると思う。

朝鮮のかくおかべこしながらききたいとのぞみて na ŋ-ka-ra 〈原八24〉

改修本に16例増えていることは、「ちゃくがん（着岸）」のようにcya-ku ŋ-kan 〈原十20〉がcya-ku-kan 〈改中20ウ〉のように、鼻音的要素が喪失することを意味する。

ギは、原刊本では全て第一方法のŋ-kで表記されているが、改修本でも新たな2例がkで表記されている以外は全てŋ-kで表記されている。

いそぎ 'i-so ŋ-ki 〈原六11ウ〉　　'i-so ŋ-ki 〈改六16ウ〉

グは、原刊本と改修本ではŋ-kで表記されているのがほとんどであるが、ŋ kの表記は見られない。

平音kの表記は原刊本で6例、改修本で14例、重刊本で11例見られるが、何れもŋ k

からkへ改修されたか、新たにでてくる単語である。

じうぐん zi-'u ŋ-kun 〈原九24〉　zi-'u-kun 〈改九34〉

ゲは、原刊本でŋ-kの表記が43例見られるが、ŋkの表記は見られない。改修本も同じである。重刊本ではŋ-kからŋk方へ改修が行われ、ŋk で表記されている。

平音のkの表記は原刊本で1例見られるが、改修本では6例で増えている。これはŋ-kから改修されたものか、改められた語である。

ゴは、原刊本でŋkの音注が51例見られるが、ガ行の他の所では見られなかった第二方法のŋkの音注が11例見られる。改修本ではŋkは見られないが、原刊本でŋkであったのが改修本ではkに改修されて、kが21例で非常に多く見られる。

じうごにん zi-'u-ŋ ko-nin 〈原五15〉　zi-'u-ko-nin 〈改五21ウ〉

また、原刊本のŋ-kの音注もkに改修されて、鼻音的要素がなくなっている。

なにごと na-ni ŋ-ko-to 〈原三14〉　na-ni-ko-to 〈改三19〉

2）ザ行音表記

ザ行音の音注表記は、大部分sの有声歯音zで表記されているが、原刊本では濁音節の前の音節の末尾に鼻音を付したのが見られる。また、稀ではあるが無声歯音sの表記も見られる。ザ行音の頭部の音注分布は、次の表3）の通りである。

頭部の場合、原則としてzで表記されている。原刊本、改修本では稀にsの表記も見られるが、重刊本では全てzに改修され、音注表記が統一されている。

ザは、zで表記されている。ジは、ほとんどzで表記されているがsで表記されているのが原刊本で2例見られる。特に、「じゆう」は2例がziで表記されているにもかかわらず1例がsiで表記されているものがあるが、改修されることを考えると誤りであろう。

表3）頭部ザ行音の音注分布

	原刊本		改修本		重刊本	
	z	s	z	s	z	s
ザ	4	0	5	0	5	0
ジ	54	2	52	6	52	0
ズ	0	6	5	3	5	0
ゼ	13	1	9	0	7	0
ゾ	71	0	12	0	97	0

じせつ（時節）si-sy ∂ i-ccu 〈原三13〉

じゆう（自由）si-'yu-'u 〈原八7ウ〉

zi-'yu-'u 〈改八10ウ〉

一方、「じせつ」は原刊本に1例、改修本に5例見られるが、全てsiで表記されている。このsの音注は韓国の漢字音（si-c ∂ r)の影響であると思われる。

ズは、原刊本で語頭に現れるのは「ずいぶん」6例しかないが、音注は全てsuで表記されている。改修本では四例がzuに改修され、重刊

本では全てzuに改修されている。

ずいぶん（随分）su-'i-pun〈原四4〉・su-'i-pun〈原十7ウ〉

zu-'i-pun〈改四8ウ〉・su-'i-pun〈原上14〉

zu-'i-pun〈重四5ウ〉・zu-'i-pun〈重上11ウ〉

「ずいぶん」の音注をsuで表記しているのはやはり韓国語の「随」の漢字音（su）の影響であると思われる。

ぜは、原刊本でzの音注が13例、sの音注が1例表記されている。sの「ぜん」1例は、韓国語の「膳」の漢字音（sy ∂ n)の影響であると思われる。zで表記されているのは全て韓国語の漢字音の子音がcである。

ぜん（膳）　sy ∂ n　〈原六9〉

ぜんごう（前後）zy ∂ i ŋ-ko-'u〈原四25ウ〉

ぜんぶ（全部）zy ∂ im-pu　〈原二8〉

改修本から重刊本へは「御ぜん」'o-sy ∂ nのsで音注されているのが'o-zy ∂ n〈重六11ウ〉のようにzへ改修されている。ゾは、全てzoで表記されている。

内部のザ行は、n-z、z、n-s、sの四つの音注で表記されている。その分布は表4）の通りである。

ザは、原刊本ではほとんどzaで表記されているが、n-zの表記が6例、saの表記が10例

表4）内部ザ行の音注分布

	原刊本				改修本				重刊本			
	ns	ns	z	s	ns	ns	z	s	nz	nz	z	s
ザ	6	0	283	10	0	0	410	8	0	0	331	3
ジ	6	0	164	31	0	0	263	24	0	0	210	3
ズ	55	17	1	10	0	0	22	6	0	0	55	1
ゼ	0	0	49	1	0	0	47	7	0	0	47	0
ゾ	8	1	13	1	0	0	26	0	0	0	28	0

見られる。

御ざどころ（御座所）ŋ ko-za-to-ko-ro〈原五19ウ〉

わざと（副）　'oan-za-tto　〈原二10〉

きざみ（刻）　ki-sa-mi　〈原七5〉

改修本と重刊本では～n-z音注はzに改修され、鼻音nがなくなっている。

ジもほとんど zi で表記されている。nzi の表記が 6 例見られるが改修本では z に改修され鼻音 n がなくなっている。

ほうじ（報ず） ho-'un-zi 〈原六19ウ〉　ho-'u-zi 〈改六28ウ〉

ズは、原刊本で特に n-zu の音注が55例で、他のザ行と比べると鼻音 n が非常に多く現れる。その反面 zu の表記は 1 例しかない。

ザ行の他のところでは見られなかった～ n-su の表記が、17例も見られる。これらは改修本で全て z または s に改修され、鼻音 n がなくなっている。

うず（助動） 'un-su 〈原八21ウ〉　'u-zu 〈改八32〉

ゼは、原刊本で z の表記が49例、s の表記は 1 例のみであるが、改修本では 7 例で増えている。これらは重刊本で全て z に改修されている。

ゾの場合、n-zo、zo、n-so、so で音注が表記されている。n-zo の表記が 8 例、n-so の表記が 1 例見られるが、改修本では全て z に改修されている。

なにとぞ（何卒） na-ni-tton-zo 〈原三20〉　na-ni-tto-zo 〈改三26ウ〉

3）ダ行音表記

ダ行音の音注表記としては他の行と同じく～ n-t、nt、t の三様の表記が見られる。ダ行音の頭部の音注分布は表 5）の通りである。

頭部のダは原刊本でほとんど t で表記されているが、nt の表記も 4 例見られる。その鼻音の nt の表記が改修本では 1 例が、重刊本では全てが t で表記されている。

だんかう nta ㇷ-ko-u 〈原二13〉　ta ㇷ-ko-u 〈改二19〉

デは改修本の t が、重刊本で nt に表記されている例があるが、これは前述したように濁音を表すための表記であろう。

でわのくに ty ∂ i-'oa-no-ku-ni 〈原九24、改九34ウ〉　nty ∂ i-'oa-no-ku-ni 〈重九14〉

表 5）頭部ダ行音の音注分布

	原刊本		改修本		重刊本	
	nt	t	nt	t	nt	t
ダ	4	23	3	52	0	52
ヂ	0	0	0	0	0	0
ヅ	0	0	0	0	0	0
デ	0	1	0	3	2	0
ド	8	23	19	14	12	18

ドは、原刊本、改修本、重刊本ともに語頭に n が表記されているが、すべて「どこ、どち」など不定称代名詞である。これは「どうして」nto-si-ttyi 〈改一16〉、「どちら」nto-cci-ra 〈改八22ウ〉など新しい単語が増えたからである。ドに鼻音表記が多く見られることは鼻音性が多く残っていたからである。

内部のダ行音も他の行と同様に～ n-t、nt、t で表記されている。その音注の分布は表 6）通りである。

表6）内部ダ行音の音注分布

	原刊本			改修本			重刊本		
	n-t	nt	t	n-t	nt	t	n-t	nt	t
ダ	119	0	11	7	0	166	0	93	46
ヂ	2	0	2	1	0	23	0	0	5
ヅ	101	0	4	8	0	103	0	0	96
デ	198	0	5	1	0	141	0	41	173
ド	429	0	13	22	0	276	0	31	229

内部のダは、原刊本でn-tの表記がほとんどで稀にtの表記が見られる。改修本ではこれらのn-t表記がほとんどtに改修され、鼻音nがなくなっている。

あいだ 'a-'in-ta 〈原三23ウ〉

'a-'i-ta 〈改三31〉

改修本のn-tが7例見られることからこの時期のダは鼻音がほとんどなくなったが、わずかに混同を見せていたと言える。

あいだ 'a-'in-ta 〈改中8〉　'a-'i-ta 〈改中9〉

重刊本では、鼻音のn-tの表記は完全になくなっているのに対し、濁音表記であるntの表記が多く使われている。

ヂも同じく原刊本ではn-c表記の「うぢな」「あわぢ」の2例が「うぢな」「姓名」に改修されているし、n-cは改修が行われてない「あわぢ」'a-'oan-ciで表記されている。それ以外は改修本で全てcで表記されている。

重刊本では、改修本に鼻音nが1例残っていたのが鼻音nがなくなっている。

あわぢ 'a-'oan-ci 〈改九37ウ〉　'a-'oa-ci 〈重九17〉

また、重刊本の特徴である同音節に鼻音を付けて表す一綴字方式のncの表記はヂでは見られない。破擦音cの場合、破裂音より清濁音の混同が起こりにくいので、鼻音的要素が喪失した段階では鼻音を表記する必要がなかったからであろう。

ヅは、改修本では同じくn-cからcに改修され、鼻音がほとんどなくなっている。

いづれも 'in-cu-ry·∂ i-mo 〈原二3ウ〉　'i-c ω -r ∂ i-mo 〈改二4ウ〉

重刊本では全てcに改修されている。ヂと同じ理由でnc表記は見られない。

デは、原刊本でn-tの表記がほとんどである。tの表記はわずか5例である。

めでたく my ∂ n-ty ∂ i-ta-ku 〈原七22〉

改修本ではn-tからtに改修され鼻音がほとんどなくなっている。n-tの鼻音表記は1例見られるだけである。

ドも、原刊本でn-tの表記がほとんどである。改修本へはn-tからtへ改修されているが、他のところでは見られなかったntの方へ3例が改修されている。

えど 'y ∂ in-to 〈原六17ウ〉　ry ∂ i-to 〈改六25ウ〉

重刊本ではn-tの鼻音表記は完全になくなっている。改修本でn-tとtの表記がntに改

表７）頭部バ行の音注分布

	原刊本		改修本		重刊本	
	mp	p	mp	p	mp	p
バ	9	19	13	17	10	12
ビ	0	4	0	5	2	6
ブ	13	7	31	3	29	2
ベ	4	6	0	10	4	3
ボ	1	0	0	0	0	0

修されているのが多く見られる。

おどり 'on-to-ri 〈改六９ウ〉

'o-nto-ri 〈重六８ウ〉

４）バ行音表記

バ行音の表記として、他の行と同じように m-p、mp、p の音注が見られる。バ行の頭部における濁音表記の分布は表７）の通りである。

頭部のバ行は、mp と p で表記されているが、mp で表記されているのは全て字音語でその子音がmである漢字音である。

ばんかた（晩方） mpan-ka-ta 〈原六４ウ、改六６ウ、重六５ウ〉

p で表記されているのは非字音語であるか、子音がmでない字音語である。

ばかり（助詞） pa-kka-ri 〈原三９ウ〉

以上の例で見られるように、ばかり、ばん（番）などは pa で、ばん（晩）ばん（万）などは mpa を表記されているのはmで始まる漢字音は濁音バに鼻音的要素が残っていたので、それを表しているのであろう。

ビは、原刊・改修本においてはｐで表記されているが、重刊本では mp の表記が２例見られる。ブは、p と mp で表記されているが、mp の方が多く表記されている。mp で表記されているのは「奉行、豊後、無事」のような漢字音で改修・重刊本ともに改修されていない。この中の「豊」は韓国人が読むと［pu］になりやすいので、それを防ぐために鼻音mを付けて表記したと思われる。「無」はおそらく鼻音的要素が重刊本の時期まで残っていたのであろう。ｐで表記されているのは原刊・改修・重刊本ともに「分」だけでこれは韓国の音も「pun」であるので、他の表記を必要としなかったと思われる。

ベは、原刊本でｐ、mp の二様の表記が現れるが、mp ４例は改修本では全てｐに改修されている。

べち（別） mpy ∂ i-ci 〈原－25〉　py ∂ i-ci 〈改－38〉

重刊本では再び mp が４例見られるが、これは重刊本で新たに現れる語である。

内部のバ行の音注は、m-p、mp、p で表記されている。その音注の分布は表８）の通りである

表８）内部バ行の音注分布

	原刊本			改修本			重刊本		
	m-p	mp	p	m-p	mp	p	m-p	mp	p
バ	18	9	129	0	5	99	0	6	67
ビ	6	1	38	0	0	50	0	2	34
ブ	2	6	34	0	12	47	0	17	35
ベ	48	2	10	0	1	52	0	4	20
ボ	0	1	20	0	12	35	0	7	31

内部のバは、原刊本では m-p、mp、p で表記されているが、m-p の音注が改修本で p に改修され、鼻音mがなくなっている。

および（及ぶ）'o-yom-pa 〈原八25ウ〉　'o-yo-pa 〈改八38〉

ビもバと同じく m-p から p に改修され、鼻音表記がなくなっている。

くさび（楔）ku-sam-pi 〈原八21ウ〉　ku-sa-pi 〈改八31ウ〉

ブも原刊本で鼻音表記 m-p が改修本では p に改修され、鼻音がなくなっている。それ以外はほとんど変化が見られない。

ベは、原刊本の大部分の m-p が改修本では全て p に改修され鼻音がなくなっている。ただ、原刊本の mp は p になるが（「そうべつ（総別）」〈原二２ウ〉）、原刊本で m-p 表記だったのが改修本で mp になっているのがある。

しかるべき si-ka-rum-py ∂ i-ki 〈原七17ウ〉　si-ka-rum-py ∂ i-ki 〈原十８ウ〉

si-ka-ru-mpy ∂ i-ki 〈改七22〉　si-ka-ru-py ∂ i-ki 〈改上16〉

ボは大部分 p で表記されているが、原刊本では「my ∂ n-mpo-ku」（面目）〈原五28〉１例が mp で表記されている。改修本には mp の表記が増えているが、改修本で新たに見られる語である。

３、濁音における鼻音的要素の喪失過程

濁音における鼻音的要素がハングルの音注表記にどのように現れているかを、分析した。その分析の結果、原刊本から改修本へ、改修本から重刊本へ改修されることによって、語による差はあるものの濁音の鼻音的要素がなくなっており、直前の音節の末尾に鼻音を加える第一方法は濁音の鼻音的要素を反映していることが分かった。

なお、語彙の変化があるが、内部における全体的な濁音の鼻音的要素が喪失する傾向を比率でまとめてみると次の表９）のようになる。

ガ行は原刊本でほとんどの濁音に鼻音的要素が入っていた。改修本では少しなくなっているが、大きな変化は見られない。重刊本ではかなり鼻音的要素がなくなっているし、特に「ぐ」はほとんどなくなっている。一方、「ご」は逆に増えてほとんどの濁音に鼻音的要素が入っているのは理解しがたいが、後舌の破裂音であるゴが鼻音的要素が多く入っていたのが予想

表9）内部の鼻音的要素率（%）

	が	ぎ	ぐ	げ	ご	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	だ	ぢ	づ	で	ど	ば	び	ぶ	べ	ぼ
原	98	100	94	98	85	2	3	87	0	39	92	50	96	98	97	7	13	5	81	0
改	95	97	83	90	76	0	0	0	0	0	4	7	7	07	7	0	0	0	0	0
重	54	29	8	27	98	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

される。ただ、前述したように重刊本だけの特徴があるので重刊本の数字が鼻音的要素を表しているかは疑問点として残る。ザ行の鼻音的要素は原刊本にわずかにみられるが、改修本以前に完全に喪失している。ダ行は原刊本に見られる濁音にはほとんど鼻音的要素が入っていたが、改修本ではほとんどなくなって、重刊本では完全に喪失している。バ行は原刊本で「べ」以外はわずかに見られたが、改修本では完全に喪失している。

一方、他の学習書の濁音表記を分析してみると、『倭語類解』は濁音表記の為に設けられている「伊呂波間音」という原則があることから、人為的な要因が加えられているようである。

『方言類釈』は音注表記において、自国語の表記を準用する立場を採るなどの特徴を見せているが、表記が多様に現れることから音声に忠実な表記と見て良い。『方言類釈』の濁音にも『捷解新語』と同じ表記法で記されているが、鼻音は「切れ目」の頭部では鼻音が現れず、「切れ目」の内部のみで現れる。その分布は次の表10）のように、濁音に於ける鼻音的要素はガ・ダ・バ・ザ行の順で、「原刊本」と同じ傾向である。

表10）『方言類釈』の内部の濁音表記

音節	が	ぎ	ぐ	げ	ご	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	だ	ぢ	づ	で	ど	ば	び	ぶ	べ	ぼ
鼻音	243	77	45	37	57	0	8	9	0	4	60	30	42	34	46	22	8	32	19	4

4、まとめ

朝鮮資料の濁音に付けられている音注表記を資料として、会話文を検討し、「切れ目」の頭部と内部に分けて分析してみた。その結果、第一方法は濁音における鼻音的要素を反映していることが分かった。

頭部における鼻音的要素は『捷解新語』の原刊本の時期に「どこ」など不定称代名詞、「万」などの漢字音及びいくつかの語彙を除くと、既に喪失していたのである。

内部では、ガ行は重刊本にも見られることから十八世紀以後にも存在したようであるが、ザ・バ行は原刊本でわずかに残っていたのが、改修本では完全に喪失している。ダ行は原刊本までは鼻音性を保っていたが、改修本ではわずかに見られ、重刊本では完全に喪失した。

喪失順は比率から考えると前舌から後舌、摩擦音から破裂音へ、即ち、ザ行、バ行、ダ行、ガ行の順である[8]。その理由は後舌の方が鼻腔から近く、前舌の方が鼻腔から遠いので前舌から鼻腔性が喪失したと思われる。『日本大文典』の指摘を考えると、ザ・バ行は十七世紀初め頃、ダ行は十八世紀初め頃に喪失したということが予想される。

注

（1）高麗時代の末、外交に必要な通訳官養成（当時は中国語）のために中央官庁に置かれたが、朝鮮朝でこれを継承し、1394年中国語、1395年蒙古語、1415年日本語、女真語の学習を開始した。『訳官榜目』（司訳院編）には倭学で1591年から1885年の間に計318名を教えたと記されている。

（2）『伊路波』『消息』『書格』『老乞大』『童子教』『雑語』『本草』『議論』『通信』『鳩養物語』『庭訓往来』『応永記』『雑筆』『富士』の14種類で、現存するのは『伊路波』のみである。

（3）「捷解新語解題」(1973) 京都大学国文学会、pp231－234参照。

（4）宋希環(1420)、日本紀行、約33例の日本の地名が含まれている。

（5）申叔舟(1471)、日本紀行、約165例の日本の地名、人名が含まれている。

（6）安田章(1980)『朝鮮資料と中世国語』笠間書院、p119。

（7）ㄱ-k のような第一方法は巻一から四までの表記に（～ㄱ-k:79/ㄱ k:0)、ㄱ k のような第二方法は巻五から巻十までの表記に（～ㄱ-k:2/ㄱ k:219）使われている。例外は２例しか見られない。

（8）浜田敦(1956)及び、大友信一（1956）が原刊本を資料として予想した喪失順と一致している。

参考文献

大友信一（1956）「『捷解新語』に見られる濁音表記」『言語研究』30日本言語学会

亀井　孝（1984）「『捷解新語』の音注法」『亀井論文集３』、吉川弘文館

多和田眞一郎（1997）『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』武蔵野書院

土井洋一・浜田敦・安田章（1959）「優語類解考」『国語国文』28-9、京都大学国文学会

浜田　敦（1970）『朝鮮資料による日本語研究』、岩波書店

――――（1983）『続朝鮮資料による日本語研究』、臨川書店

森田　武（1973）「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学国文学会

安田　章（1980）『朝鮮資料と中世国語』、笠間書院

李　基文（1975）『韓国語の歴史』、大修館書店

宋　　敏（1972）「十八世紀前期韓国語の音韻体系」誠心女子大論文集６

李　柄銑（1967）「鼻母音化現象巧－慶尚南道方言を中心に－」『国語国文』37（韓国）

許　　雄（1985）『国語音韻学』、正音社（韓国）

本稿は、国語学会平成10年度春季大会（平成10年５月31日、白百合女子大学）で口頭発表した内容に修正加筆を施したものである。発表の席上、また、それ以外の機会にも御指導下さいました先生方に深く御礼を申し上げます。

（ちょ　かんひ　韓国　昌信大学　日本語科　副教授）